

# 「李圖」攷

花崎隆一郎

## 一 序言

ここにいう「李圖」とは、朱震撰「漢上易卦圖」卷上に載せる李挺之「變卦反對圖」八篇と同「六十四卦相生圖」一篇との計九篇のことである。朱震は、前者において周易六十四卦の卦形が乾・坤の兩體を基礎として、それぞれ上下反對の理に據り悉備せられることを示さんとし、後者において六十四卦の生卦の次序を明確に示さんとする。さて、本論の目的は、作者李挺之その人の周邊とともに、この「李圖」九篇の構成と性格、圖のもつ意義、延いてはその由來と系譜とを詳らかにするにある。

## 二 李挺之の經歷と學問

李挺之、名は之才、挺之は字、名と字とともに稱せられる（本論では字を稱する）。北宋五子之首、邵雍（康節先生）の師として有名である。宋史儒林傳などに據れば、宋初、青社（東都事略）は「青州」に作る。今の山東省濰縣附近に生まる（生年不詳）。仁宗の天聖八年（一〇三〇年）、同進士出身。人となり朴率、師の穆修の呵怒にもよく謹直を以て仕え、卒にその易を専らに授けられたという。然し官途に就いて

からは恵まれず、棲遲することも多かつた。今、その官歴と事蹟とについて要約すると次の如くである。

初め、衛州獲嘉（今の河南省獲嘉縣）主簿、權共城（今の同省輝縣）の令となる。この時、邵雍の結廬して勉勵する蘇門山百源（輝縣の西北にあり）の上を訪れ、その進學の法を試みたという。その後、棲遲すること久しくして再び孟州（今の同省孟縣の南）司法參軍に調せられ、後、石延年の推輓により澤州（今の山西省晉城縣の東北）の簽署判官となる。澤州において劉義叟なる者に曆法を授け、義叟はこれを成し、所謂「義叟曆法」として世に稱せられるに至った。つづいて殿中丞に轉じたが、適、母憂に丁り除喪の後、懷州（今の河南省沁陽縣附近）の官舎（懷州に守たりし朋友尹源の官舎という）で暴卒した。時に慶曆（儒林傳は「寶曆」に誤る）五年乙酉（一〇四五年）二月という。

次に彼の學問について一瞥する。結論を先にいえば、その學問は易・春秋・文學の三分野に統括できるのであるが、それらはすべて師の穆修に負うものようである。而してその本領は圖書・象數を根據とした易學にあり、それは遂には弟子である邵雍の壯大なる歴史解釋・宇宙解釋となつて結實して行つたのである。今、これらのことを儒林傳その他に據つて左に示し、後、些か考察を加えてみたい。

一、師河南穆修。……卒能受易。時蘇舜欽輩、亦從修學易、其專授受者、惟之才爾。修之易受之種放、放受之陳搏、源流最遠。其圖書・象數・變通之妙、秦・漢以來、鮮有知者。(宋史卷四三二、李之才傳)

二、之才叩門來謁、勞苦之曰、好學篤志、果何似。雍曰、簡策之外、未有適也。之才曰、君非徒簡策者。其如物理之學何。他日則又曰、物理之學學矣。不有性命之學乎。雍再拜願受業。於是先示之以陸淳春秋。意欲以春秋表儀五經。既可語五經大旨、則授易而終焉。其後、雍卒以易名世。之才器大難乎。(同右)

三、孟州司法參軍李之才、年三十九。……能爲古文章。語直意遂、不肆不窮、固足蹈及前輩、非某所敢品目。(尹洙「河南先生文集」卷之六、「上葉道卿舍人薦李之才書」宋史李之才傳所引)

一は、師の穆修とともに宋史文苑傳(卷四三二)に名を列ねる蘇舜欽をも凌いだ李挺之の易學に關する才能の非凡なるを述べ、つづいてその學統が、陳搏(？—九八九)——種放(？—一〇一五)——穆修(九七九—一〇三三)——李之才(？—一〇四五)と直線を以て連なり、その源流の遠く端緒あることを示したものである。然し、この「源流最遠」と稱せられる傳授的系譜のうち、種放——穆修については多分に疑問があり斷絶すべきこと、すでに今井宇三郎博士の考察と批判とにある通りである。而してここにいう「易」が圖書・象數の所謂「易圖學」・「象數學」に關するもので、王・韓注に象徴される唐代固定の義理易とは袂別した異質のものであることも明瞭である。

二は、既述の李挺之が結廬して勉勵する邵雍を訪問した時の一節である。邵雍に示した李挺之の進學の法を宋史の文意に則して見れば、A 簡策すなわち科擧の學を排し、B 物理の學を學び、C

性命の學を學び、然る後、D 易を學んで、完結することとなる。そのうち、B・Cが具體的とはいかなる學問であるのかは不明であるが、Cについては幾分の忖度が可能である。即ち、Cの手段として「陸淳の春秋の法を座標として五經を律してゆく」とするからには、それが繁煩なる訓詁注釋に拘らぬ自由なる經典の解釋と大いに關係あるものと考えられる。然らば、「性命の學」とは、五經の經典そのものに根據を置くところの新しくして獨自なる形而上學であり、後來の所謂「性命理氣の學」に連なる學問であるといえよう。

思うに、名分を正し尊王を標榜する胡瑗・孫復に代表される北宋春秋學に大なる影響を與えた陸淳の春秋は、當時士人の共に學ぶところであつたのであろう。唐代、啖助を師とし趙匡を先輩とする陸淳の學問が三傳の批判の上に築かれたものとはいへ、その眞意はいわば「廢傳尊經」にあつたものと察せられる。斯様な春秋學の理解の上に醸された自由な風潮の中で洗練されたのが宋初士人の學風であり、李挺之を首とする穆修門下もその例外ではなかつた。李挺之の友人尹洙が師の穆修とともに當時著名な春秋家であつたということは、よくこれらことを物語っている。又、邵雍門下の記録といわれる「皇極經世書」觀物外篇下には、「某人受春秋於尹師魯、尹師魯受於穆伯長。」とあり、春秋の傳授を穆修——尹洙——邵雍 としてゐるのを見れば、穆門の首たる李挺之も師の穆修・友人尹洙の影響を多分に蒙つたであらうことは想像に難くない。更に又、同篇には、「春秋、三傳之外、陸淳・啖助可以兼治。」ともあり、上記の如き穆門の春秋觀を端的に象徴している。

要するに、李挺之の圖書・象數の易學の根底にあつたのは當時流行の春秋學であり、兩者の綜合的結實として發展していったのが弟子の

邵雍の歴史解釋なりと考えられるのである。

三は、友人尹洙が李挺之の昇任を依頼すべく、石延年に因り中書舍人葉道卿に上った推薦書の一節であり、ここに引用したのは彼の能文に對する贊辭である。

當時の文運と古文の復興とについて宋史穆修傳（卷四四二）、文苑傳所收は、

自五代文微、國初柳開始爲古文。其後、楊億・劉筠、尙聲偶之辭、天下學者、靡然從之。修於是時獨以古文稱。蘇舜欽兄弟、多從之游。修雖窮死、然一時士大夫、稱能文者、必曰穆參軍。

と要約する。ここに些か贅言を用うれば次のように言うことができよう。即ち、

五代より宋初の、楊億・劉筠に代表される藻麗修靡なる詩文に對し、中唐韓・柳の古文を復興せんと盡瘁した柳開につづく穆修一派のことを述べた右のことばは、遂に歐陽脩によつてその目的を果し、古文の隆盛は趙宋一代の文運を決定することとなつた、と。

この穆修一派の著名人としては、右の文中にみえる蘇舜欽・舜欽兄弟の外、尹源・洙兄弟、石延年、祖無擇らを擧げることができるが、李挺之をもその一員に列するのが自然のようである。それは前記の贊辭とともに、慶曆年間、祖無擇の手になる「河南穆公集」卷二に、

因按其舊、錄爲別本、與隴西李之才、參讀累月、詳而後止。（唐柳先生集後序と、「柳河東集」諸本の校合參讀を穆・李師弟間で行つたことを述べているからである。又、右後序の末尾に「天聖元年（一〇三三年）秋九月、河南穆修伯長後序」とあり、李挺之の古文への傾倒がかなり若年からであったことを知るができる。ただ、詩文を今に残さぬがため、その實際に觸れることは不可能である。

### 三 「李圖」の構成と性格

「李圖」九篇を最も簡明に解説するのは、「宋元學案補遺」にも引く項安世「項氏家説」のことばである。今、圖を「變卦反對圖」八篇と「六十四卦相生圖」一篇との二項に分ち、それぞれの冒頭にそのことばを引用し、逐次、圖の構成と性格とを考えたい。

#### 一 「變卦反對圖」八篇

李挺之反對法、其實即生卦法也。故世之言卦變者、皆自挺之出。其法、以乾父坤母、爲二卦不反對。又以乾・坤三交、生六卦亦不反對。頤交大過、一也。小過交中孚、二也。坎交離、三也。又以乾交一陰、生六卦反對。姤反夬、同人反大有、履反小畜、凡六也。坤交一陰、生十二卦反對。復反剝、師反比、謙反豫、凡六也。又以乾交二陰、生十二卦反對。遯反大壯、訟反需、无妄反大畜、睽反家人、兌反巽、革反鼎、凡十二也。坤交二陽、生十二卦反對。臨反觀、明夷反晉、升反萃、蹇反解、艮反震、蒙反屯、凡十二也。又以乾交三陰、生十二卦。否反泰、恆反咸、豐反旅、歸妹反漸、節反渙、既濟反未濟、凡十二也。又坤交三陽、生十二卦。泰反否、損反益、賁反噬嗑、蠱反隨、井反困、未濟反既濟、凡十二也。三陰三陽數內、否・泰・既濟・未濟四卦相重、止各十卦爾。右、六十四卦、雖皆自乾・坤來、而乾・坤之交、不出于三。故推卦變者、因乾・坤初交、爲復・姤、而以爲一陰一陽者、皆自復・姤來。再交、爲臨・遯、而以爲二陰一陽者、皆自臨・遯來。三交、爲否・泰、而以爲三陰三陽者、皆自否・泰來。蓋乾・坤之變、自此六卦始、則繼此而變者、當推此六卦、而爲所從來之地。理或然也。（項安世「項氏家説」卷二、說經篇二。宋元學案補遺卷九、「殿丞李

先生之才(附錄 所引)

凡そ「反對」を以て卦變を説くのは虞翻に始まる。例えば、觀卦に「反臨」といひ、明夷に「反晉」といふのがそれである。ただ、虞翻は「爻之」(荀爽の所謂「升降」と)「消息」とを以て卦變の主なる定法となし、「反對」を説くこと稀であった。然るに李挺之はこの「爻之」(「升降」と)「消息」とを自家藥籠中に收め、更に兩者を蔽うに「反對」を以てし、「反對」をば卦變の定法の根據と考えたのである。

その圖は、乾・坤二卦を祖として、まず不反對の卦形(所謂「反復不衰卦」)六卦に着目し、これらを二圖とする。次にその他の卦形を一陰・一陽、二陰・二陽、三陰・三陽、それぞれの下生により消卦と息卦とに分類し、後、「升降」の法を以て次序を定め、更に「反對」の理に従つて整理し、都合六圖とする。従つて圖は、後に林至もその著「易禪傳」外篇に言う如く、「上下體を兼ねたる變」、即ち、一卦の上體(外卦)と下體(内卦)とが、反對卦ではともに爻位を變ずることとなる。而してその間、泰・否・既・未濟四卦の重複は避けられぬもの、合計八篇の圖として通覽するとき、周易六十四卦の組織は極めて明瞭となる。次にその圖を掲げる。

李挺之變卦反對圖

乾坤二卦爲易之門萬物之祖圖第一

乾老陽☰

坤老陰☷

乾坤相索三(爻)變六卦不反對圖第一

坤盛而 乾盛而 坤來交 乾來交 過大☱☲ 過小☱☲ 過中☱☲ 離☲☲

乾卦一陰下生反對變六卦圖第三

姤☱☲ 同人☲☱ 履☱☲ 否☷☰ 比☲☱ 小畜☱☲

坤卦一陽下生反對變六卦圖第四

復☱☲ 師☱☲ 謙☱☲ 臨☱☲ 比☲☱ 豫☱☲

乾卦下生三陰各六變反對變十二卦圖第五

遯☶☰ 訟☱☲ 無妄☱☲ 否☷☰ 觀☱☲ 革☱☲ 坤☷☷ 需☱☲ 蒙☱☲ 漸☱☲ 困☱☲ 震☳☳

坤卦下生二陽各六變反對變十二卦圖第六

臨☱☲ 夷明☱☲ 升☱☲ 臨☱☲ 豐☱☲ 泰☱☲ 夬☱☲ 臨☱☲ 豐☱☲ 泰☱☲ 夬☱☲ 臨☱☲

乾卦下生三陰各六變反對變十二卦圖第七

姤☱☲ 否☷☰ 恆☱☲ 豐☱☲ 姤☱☲ 否☷☰ 恆☱☲ 豐☱☲ 姤☱☲ 否☷☰ 恆☱☲ 豐☱☲

坤卦下生三陽各六變反對變十二卦圖第八

泰☱☲ 損☱☲ 賁☱☲ 泰☱☲ 損☱☲ 賁☱☲ 泰☱☲ 損☱☲ 賁☱☲ 泰☱☲ 損☱☲ 賁☱☲

※「通志堂經解」本、「交」の字あり。  
(黃宗義「易學象數論」卷二に據る)

ところで朱震はこの圖の性格を説くに當たつて、自らの私淑する李挺之の弟子邵雍のこゝばを中心とする。朱震所引の邵雍のこゝばの主なるものは次の三條である。

(イ) 乾・坤之名位、不可易也。坎・離名可易、而位不可易也。震・巽位可易、而名不可易也。兌・艮名與位、皆可易也。(乾・坤相索三交變六卦不反對圖第二)に付す。「觀物外篇」上所載)

(ロ) 離肖乾、坎肖坤、中孚肖乾、頤肖離、小過肖坤、大過肖坎。是以乾・坤・離・坎・中孚・頤・大過・小過、皆不可易者也。(同右)

(ハ) 卦之反對、皆六陽六陰也。在易則六陽六陰者、十有二對也。去四正者、八陽四陰、八陰四陽者、各六對也。十陽二陰、十陰二陽者、各三對也。(變卦反對圖「八篇の解説文中の引用。「觀物外篇」上所載)

思うに邵雍先天象數易の根本理念は、繫辭傳の易有太極章と一陰一陽章とを敷衍したところの體用二元に據る生成循環の思想である。即ち、乾・坤二卦を萬物の「祖」として「變」を生じ、「變」はまた「祖」となつて更に異つた「變」を生ずるものと考へる。換言すれば、「體」は變じて「用」となり、その「用」はまた「體」として更に新たなる「用」となる。このことを端的に表現したのが、

一變而二、二變而四、三變而八卦成矣。四變而十有六、五變而三十有二、六變而六十四卦備矣。(「觀物外篇」下)  
という、所謂「加一倍法」に則る「八卦重爲六十四卦圖」である。

從つてここにいう「體」とは生成循環の過程において「不變」となつたものであり、「用」とは「變」じたものであるといえよう。而して、萬物の「祖」(即ち「體」)たる乾・坤二卦の窮極的なそれは「太極」であり、「變」(即ち「用」)の窮極は萬物の象徴たる「六十四卦」なりと考へるのである。

邵雍は圖において「反對」の例より除去される乾・坤二卦を含む反對の卦形八卦の特殊性について、前掲文(イ)・(ロ)の如く言うのであるが、その意は「八卦重爲六十四卦圖」を根據とした名位論である。今これを「皇極經世緒言」のこゝばに據り表示すると次の如くである。  
(イ)の枠内の右肩に付した。印は陽を、●印は陰を示す。なお、(ロ)の卦形欄右側上下に付した。●印は兩儀を小成の卦に分つたものである。

		(イ) 以小成之卦言							
		反對	卦形	卦名	兩儀	男女	名	位	備考
坤	☷	乾	☰	坤	陽	男	不可易	不可易	四
艮	☶	巽	☴	艮	陰	女	不可易	不可易	正
坎	☵	離	☲	坎	陽	中女可	易	不可易	
震	☳	巽	☴	震	陰	中男可	易	不可易	四
兌	☱	離	☲	兌	陽	長男不可	易	可易	
乾	☰	坤	☷	乾	陰	長女不可	易	可易	

䷗ 兌	陽	少女可	易可	易	問
	陰	少男可	易可	易	
䷖ 艮					卦

(四) 以大成之卦言(位不可易)					
反對卦	形卦名	反對卦	形卦名	備	考
䷗ 兌	䷀ 乾	䷗ 兌	䷀ 乾	離、上下皆陽、自乾之體。	天
䷖ 艮	䷁ 坤	䷖ 艮	䷁ 坤	中孚、上下皆二陽而中虛。象重離、亦有乾。	四
		䷗ 兌	䷁ 坤	頤、中四陰而上下各一陽。是為長離、與離體育。	正
		䷗ 兌	䷖ 艮	坎、上下皆陰、自坤之體。	地
		䷗ 兌	䷖ 艮	小過、上下各二陰而中實。象復坎、亦有坤。	之
		䷗ 兌	䷖ 艮	大過、四陽而上下各一陰。是為長坎、與坎體育。	四
		䷗ 兌	䷖ 艮		正

(補遺)

○(四)の備考欄の「天之四正」「地之四正」は、「觀物外篇」上に説くもので「六十四卦方圓圖」を見れば明らかである。

○(頤・大過・中孚・小過・四卦之位)、為不可易、惟其各育故也。

右の表に據つても一層明らかな如く、邵雍は不反對の卦形八卦の特殊性を、卦形の「位易うべからざる」點に認めるのである。これを逆説的にいえば、反對の例に従う他の五十六卦の特殊性は「位易うべ

き」點にあることとなる。

次いで邵雍はこの五十六卦について(六)の如く集約するのであるが、これを數式で示せば左記のようになる。

6陽 6陰 ─ 乾卦下生 3陰 6陽 + 坤卦下生 3陽 6陰  
 = 24卦  
 計  
 8陽 4陰 ─ 乾卦下生 2陰 6陽 = 12卦 計  
 8陰 4陽 ─ 坤卦下生 2陽 6陰 = 12卦 計  
 10陽 2陰 ─ 乾卦一陰下生 3陽 = 6卦 計  
 10陰 2陽 ─ 坤卦一陽下生 3陰 = 6卦 計  
 12陽 2陰 ─ 坤卦一陽下生 3陽 = 6卦 計  
 12陰 2陽 ─ 乾卦一陰下生 3陰 = 6卦 計  
 (上の數式に 天之四正 4卦 地之四正 4卦 の計 8卦を加えると 64卦となる)  
 二 「六十四卦相生圖」一篇

朱子發六卦之變、即李挺之乾・坤之變。……其所以變之法、不可不知也。復・姤一陰一陽、皆在初爻、變為二(師・同人、為三(謙・履)、為四(豫・小畜)、為五(比・大有)、為六(上)(剝・夬)、各成五卦。凡一陰一陽者十卦、皆自復・姤變。臨・遯二陰二陽、皆在初二兩爻。第一變為初三(明夷・訟、為初四(震・巽、為初五(頤・大過)、——論者按、此處當如此作。(為初五(屯・鼎)、為初上(頤・大過))——各成四卦。再變為三(升・无妄、為三四(解・家人)、為二五(坎・離)、為二上(蒙・革)、亦各成四卦。三變為三四(小過・中孚)、為四五(萃・大畜、為五六(上)(觀・大壯)、各成三卦。四變為三五(蹇・睽)、為四上(晉・需)、各成一卦。五變為三上(艮・兌)、各成一卦。凡二陰二陽者二十八卦、皆自臨・遯變。否・泰三陰三陽、皆在下三爻。第一變為初二(漸・歸妹)、為初二五(旅・節)、為初二上(咸・損)、各成三卦。再變為

初三四(渙・豐)、爲初三五(未濟・既濟)、爲初三上(困・賁)、各成三卦。三變爲二三四(益・恆)、爲二三五(噬嗑・井)、爲二三上(隨・蠱)、各成三卦。凡三陰三陽十八卦、皆自否・泰變。

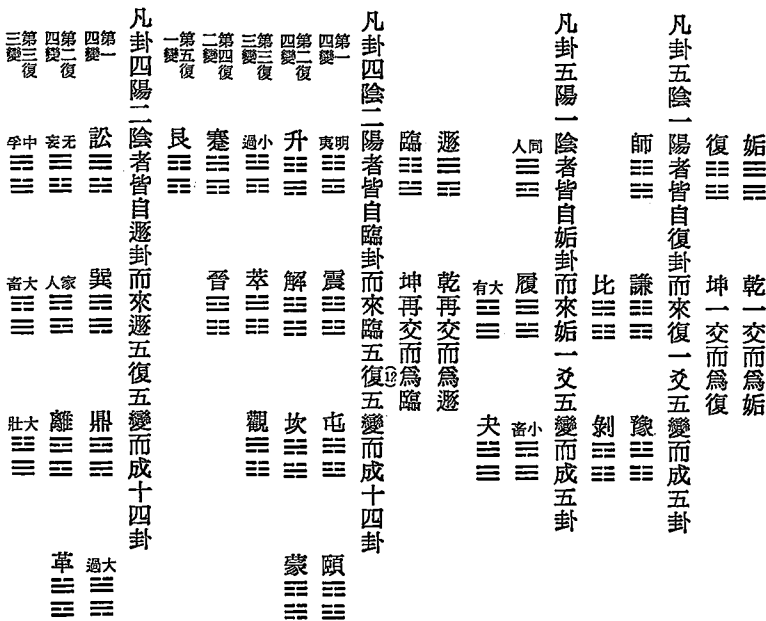
右、安世曾推其說、方三畫之時、乾・坤以三相交、其變之形、止于爲六。凡言重卦者、出于六子。及六畫之後、以六相交、其變之例、亦止于六。故以復・姤・遯・臨・否・泰六卦、爲例之主。而凡言變卦者、皆出焉。亦猶三畫之有六子也。(項安世「項氏家說」卷二「說經篇」)。宋元學案補遺卷三十七、「文定朱漢上先生」附錄 所引) ※「六」は「上」に改むべきである。

(5)・(6)の部は一七八頁の論述に詳らかである。

「相生」もまた虞翻卦變説に見えるが、その濫觴はすでに荀爽説に散見する。荀氏注の賁卦に「此本泰卦」とあり、困卦に「此本否卦」とあるのがそれである。虞翻は荀氏注を更に徹底させ、乾・坤を除く十消息卦(辟卦)に本づく生卦の法を明示したのである。例えは虞氏注において、「陽、坤に息した」復卦より、「復の初、四に之って」豫卦を生じ、「陽、息して二に至った」臨卦より、「臨の初、三に之って」升卦、「四に之って」解卦を、「臨の二、三に之って」明夷卦、「四に之って」震卦を生ずるとするのがそれである。然るに李挺之は十消息卦(辟卦)を更に壓縮して、諸卦はすべて復・姤(一陰一陽、臨・遯(二陰二陽)、否・泰(三陰三陽)の六卦より生ずるものとする。この六卦を本とすることはすでに「反對圖」にも見出されたことであるが、「相生圖」もまた六卦の爻位の「升降」を以て次序を定め、乾・坤を祖とした六十二卦生成の過程を「相生」の理に従って整理し一篇とするのである。而して、その爻位の「升降」の基礎は内卦にあり、先にも觸れた林至もまた、圖を斷じて「専ら下卦を以て變を爲

す」(「易禪傳」外篇)と云う。即ち、内卦三爻の變を基礎として外卦三爻をも變ずるわけである。次にその圖を掲げる。

李挺之六十四卦相生圖



第四復 睽 三三  
第五復 兌 三三  
一變復 否 三三

乾三交而爲否  
坤三交而爲泰

凡卦三陰三陽者皆自泰卦而來泰三復三變而成九卦

第一	妹 三三	節 三三	損 三三
第二復	豐 三三	濟 三三	賁 三三
第三復	恆 三三	井 三三	蠱 三三
第一	漸 三三	旅 三三	咸 三三
第二復	渙 三三	濟 三三	困 三三
第三復	益 三三	噬 三三	隨 三三

凡卦三陽三陰者皆自否卦而來否三復三變而成九卦

(黃宗羲「易學象數論」卷二に據る)

さて、朱震はこの圖の性格を説くのに「觀物外篇」上のことばを引いて、

夫自下而上謂之升、自上而下謂之降。升者生也、息也。降者消也。陰生陽、陽生陰、陰復生陽、陽復生陰、升降・消息・循環無窮。(「漢上易卦圖」上)

と述べ、また自らも、

往來者、以内外言也、以消息言也。自内而之外謂之往、自外而之内謂之來。(同右)

と云う。即ち、上下・内外・往來、或いは消息(即ち結果的には爻位の「升降」)を圖の基本的性格として捉えるのである。この性格を根據として圖を見ると、「反對圖」に認められたが如き重複の卦は一切

なく、六十二卦生成の過程は極めて明瞭である。然るにその過程も項安世の示した解説とともに仔細に眺めた際、變の基礎たる下爻の錯亂に矛盾が存するのである。

即ち、右の項安世の解説のうち、臨・遯二陰二陽の卦變の次序における三・四・五變(部。圖では第三復・第四復・第五復の部分)の矛盾である。この下爻の錯亂を次序正しく整理すれば次のように改められる。

(イ) 三變爲三四(小過・中孚)、爲三五(蹇・睽)、爲三上(艮・兌)、各成三卦。

(ロ) 四變爲四五(萃・大畜)、爲四上(晉・需)、各成二卦。

(ハ) 五變爲五上(觀・大壯)、各成一卦。

思うにその次序に取えて矛盾を來さしめたのは、初變の卦の上下・内外・往來、或いは消息を本卦より直接に變じたものとして、象傳に即して特に鮮明にせんと欲したがためであろう。例えば、(ロ)の四變四五の初變である萃・大畜二卦と、(ハ)の五變五上の初變である觀・大壯二卦との各々の象傳には、本卦の内卦より外卦へ上り往く剛爻・柔爻を説く文は見出せない(たとえば大畜卦の如くその文を見出せても、本卦より直接に變じたものとしては理解できない)。然るに(イ)の三變三五の蹇・睽二卦と三上の艮・兌二卦とは、各々の象傳にそのことを言う文が備わっている。このために、(イ)の三變三五と(ロ)の四變とを、又、(イ)の三變三上と(ハ)の五變五上とを交換したものと考えられる。これらのことは右の如き次序の矛盾はないものの、復・姤一陰一陽、否・泰三陰三陽の圖にも認められ、「相生」の理に據る卦變の特性が、更に初變の卦の重視という点にも示している。

後世、黃宗羲はその著「易學象數論」卷二のうち「卦變」の項にお



いづか

……至李挺之所傳變卦反對圖、可謂獨得其真。而又與六十四卦相生圖竝出、則擇而不精也。

と述べ、經文解釋上、「反對圖」こそ眞を得たるものと尊重して「相生圖」を貶し、又、その説を沿襲する胡渭は更に徹底して、

按李挺之言卦變、莫善於反對、莫不善於相生。反對者經之所有、相生者經之所無也。(易圖明辨)卷九、卦變)

と「相生圖」の無益なるを説いて憚らない。

思うに右の黃・胡二氏の論評は、生卦の次序を顧慮することなく、象傳との完全なる符合を卦變の基礎とした立場からのものである。然るにこれを形式的側面より比較した際、兩圖には「升降」の法に據る卦形の生成という、ともに相通する基本的性格の存したことは既述の論によって明らかである。即ち、李挺之本意は兩圖とも「升降」に據る卦變圖の提示にあつたものと考えられるのである。例えば「反對圖」の「乾卦一陰下生反對變六卦圖第三」の三變の生卦の次序の如きは「相生圖」の「姤一爻五變而成五卦」の三變までの次序と全く同じである。無論、「反對圖」が不反對の六卦を前に掲げ、以下「反對」を根據とするがために、二陰二陽・三陰三陽の卦では「相生圖」の次序と差異を生ずるものの、本卦たる六消息卦を以て所屬を検した際には、乾・坤二卦を除く六十二卦中、四十八卦までもが一致する。これを以てしても兩圖の底流にある性格的接點が「升降」にあることを知るのである。

#### 四 「李圖」のもつ意義

朱震「漢上易傳」は、周易上下經解釋の基礎となる象傳を説くの

に、こと卦變に關する限り、主に「李圖」に依據している。(ここに「主に」というのは、「易傳」では「相生圖」を自家藥籠中に攝取して縱横に驅使し圖そのものには忠實でないからである。これについては後述する。)次にその一端を例示する。

#### 三三 坎下解、利西南。无所往、其來復吉。……

象曰、解、險以動。動而免乎險、解。解利西南、往得衆也。其來復吉、乃得中也。……(1)坎、險也。震、動也。……解、言解乎

險難。以是動、(2)動而出乎險之外、則險難解矣。……此合二體言解也。(3)解者蹇之反。解之九二、乃蹇之九五也。九四乃蹇之

九三也。(4)坤爲西南。其體順。(5)自艮反、有平易之意。坤又爲衆。當蹇難之後、人皆厭亂。(6)四以平易之道、往順乎衆、而衆與之。是以得衆。……故曰、解利西南。往得衆也。……(漢上

易傳第四)

(1)は、解卦の卦象を外卦と内卦とに分ち小成の卦の二體として説く。

(2)は、(1)を敷衍する。即ち、外卦震☳は動いて内卦坎☵の外に出ている。故に險難は解かれる。

(3)は、反對を以て説く。「解の九二は蹇の九五であり、解の九四は蹇の九三である」とは、解の内卦坎は蹇の外卦坎より下り來つたものであり、又、解の外卦震は蹇の内卦艮の上り往つたものであることを意味する。而して、後者の蹇の内卦艮の解の外卦震に上り往くことが、象傳の「解は西南に利しく、往きて衆を得る」とである。その理由は、小成の卦震は坤下に一陽の生じた卦で、従つてその源は坤である。説卦傳に據れば、坤はその方位は西南に當たり、且つ「衆」を象徴するためである。次に、前者の蹇

の外卦坎が解の内卦坎に下り來ることが、象傳の「其れ來り復りて吉なるは、乃ち中を得ればなり」に相當する。その際、「其れ」は九二を指し、九二は正に内卦坎の中を得ているがために吉なのである。

(4)前記の如く、解の外卦震の源である坤は、その方位は西南に當たり更に又、その性質は柔順である。

(5)は、再び反對を以て説く。解の外卦震の反對卦は艮である。即ち、蹇の内卦艮がその源を、行くに平易なる坤に求められる震に上り往くことを敷衍するのである。又、一般的には、艮は山であり高くして登り難い。震はその反對であるから低い陸地（説卦傳の所謂「大塗」）であり行き易い、とも言えよう。

(6)は、三たび反對を以て説く。蹇の内卦坎より上り往った解の外卦震の源である坤は行くに平易である。坤はまた「衆」をも象徴した。震の主たる剛爻、即ち解の九四はこの平易の道を以て動き往き衆に順えば、衆も亦柔順に協力し、結果は衆を得ることとなる。

三三 巽下鼎、元吉亨。

象曰、……巽而耳目聰明。柔進而上行、得中而應乎剛、是以元亨。

……鼎、(1)自遯三變而成。一變訟、坎為耳在下、聽卑聰也。再變巽、離為目在四。三變鼎、離目在五、其視愈遠明也。所以聰明者、聖人卑巽下人、兼天下之耳以為聽。故其耳聰。兼天下之目以為視。故其目明。(2)六二之柔、進而上行至於五、居尊位而得中、下應九二之剛。柔履尊位、則无亢滿之累。得中則无過與不及之咎。應乎剛、則君臣道合、萬物皆得其養。具此四者、是

以元亨。……言元亨、則吉在其中矣。此以卦爻三變、言鼎之才也。……(漢上易傳第五)

右の易傳の文は、鼎の卦徳(末尾にいう「鼎之才」)を示すに相生を以てする。

(1)は、象傳の「耳目聰明」を説明する。「相生圖」に據れば、鼎は四陽二陰遯の第一、三變の卦である。遯の一變訟の下卦坎は身體では耳に當たる(説卦傳。内卦にあって(即ち、卑きについて)よく聽くことは「聰」である。再變の卦巽の三四五爻をとれば小成の卦離、離は目に當たり(同右、離の主たる柔爻は巽の四爻、即ち六四である。小成の卦離の主たる柔爻は巽の六四より進んで上り行き三變鼎の外卦の六五となる。その目の視ること愈々遠くに及び益々明らかとなる(離の「明」なること、これ亦説卦傳に據る)。

(2)は、源の遯より解説する。遯の六二の柔爻進んで上り行き三に至って訟、訟の六三の柔上り四に至って巽、巽の六四の柔上り五に至って鼎となる。この鼎の六五は尊位に居って外卦離の中位を得、かつ九二の剛爻に應ずる。従って尊位にあって謙虚、中位を得て過不及なく、二五應じて居臣その道にかなひ、萬物その養育を被る。さればこそ「元いに亨る」のである。

右の如き「李圖」に依據した卦變に本づく象傳の解説は他の諸卦に於いても隨處に認められる。要するに「李圖」九篇の意義は、既述した李挺之の本意の如く、「漢上易傳」に於いて象傳の解説に資するための基礎となる卦變圖の提示に於いたものといえよう。

ただここに付言すべきは、朱震の卦變説は、反對に則る象傳の解釋には「反對圖」に異論なく従うものの、こと相生に則る象傳の解釋に關しては「相生圖」に全く盲従するものではないということである。

例えば、蹇卦象傳の

蹇、利西南、往得中也。不利東北、其道窮也。  
を解説して、

蹇、自臨來。小過變也。九四往之五、即臨之坤也。……此以卦變  
四五相易、言濟蹇之道也。(漢上易傳第四)

と言ひ、その小過の象傳「過以利貞、與時行也。」を説いて、

小過、自臨來。明夷變也。臨九二之三、六三之二、成明夷、二過  
乎三也。明夷初九之四、成小過、五過乎四也。二過乎三、正也。五過  
乎四、不正也。(同右第五)

と述べて明夷を介在させるのである。これを要するに臨↓明夷↓小過  
↓蹇の次序となり、「相生圖」の、蹇が第四復初變の卦として、又、  
小過が第三復初變の卦として、明夷と同じく直ちに臨より來るとする  
のとは明かに異っている。斯様な例は他にも散見し、そこに朱震卦變  
説の獨自性が窺えるのである。従つて朱震卦變説の土臺として存する  
「相生圖」は、結果的には「漢上易傳」に於いて縱横に驅使されるこ  
とにより、象傳の解釋に貢獻しているものと言へるのである。

## 五 「李圖」の由來と系譜

まず「變卦反對圖」八篇についていへば、朱震はその「漢上易卦圖」  
上に載せる圖の解説の冒頭(通志堂經解本に據る)において、  
六十四卦、剛柔相易、周流而變。易於序卦於雜卦盡之。

と述べ、その圖の由來が既に序卦・雜卦の兩翼にあることを明示して  
いる。このうち序卦に由來することについては、「正義」において、序  
卦が「卦の次序に因つて、象に託し義を明らかにした」ものだとする  
韓康伯の總論に對する證明として、覆卦(本論でいう「反對卦」)註④⑥

「李圖」攷

の所謂「反對」二十八對五十六卦と、變卦(本論でいう「反對卦」)註  
④⑥の所謂「對卦」四對八卦とにより構成されていることを述べてい  
るのであるから、敢えて朱震の解説を俟つまでもない。然るに「衆卦  
を雜糅した」と稱せられる雜卦の排列についてこれらを檢すれば、前  
者は二十五對五十卦、後者は三對六卦となり、いずれにも屬さぬ卦が  
八卦となる。このことは圖が「雜卦においても盡くされている」とす  
る朱震の雜卦由來説と些か矛盾する。これについて朱震は、

自大過願也而下、簡冊錯亂。當曰頤羞正也。大過願也。遘遇也。  
遘當作姤。柔遇剛也。夬決也。剛決柔也。君子道長、小人道憂也。  
漸女歸待男行也。歸妹女之終也。既濟定也。未濟男之窮也。(漢上易  
傳第十一)

と述べ、雜卦の文の錯亂説を唱えて調停する。而して三對六卦の覆卦  
(反對卦、反卦)と一對二卦の變卦(不反對卦、對卦)とを成立させ、雜  
卦もまた序卦の構成に倣うべきものと考へて、雜卦由來説にも根據を  
與えるのである。ただ錯亂説の根據についてはその「易傳」に示され  
ておらず、釋然たり得ぬ點を残しているのは否めない。

次に「六十四卦相生圖」一篇についていへば、その由來は直ちに荀  
・虞二氏に、就中、卦變説の完成者としての虞翻に求められるべきも  
のと考へる。それは、蓋し次序正しき十二消息卦の推移を基礎とした  
孟喜の卦氣説に端を發した卦變の説が、既に十消息卦乃至は六消息卦  
に本づいて論議するに足る論理的整齊度を具備していたからに外なら  
ない。もちろん「相生圖」を虞氏卦變に比するとき不合の卦も多數あ  
り、

……今以此圖考之(今以六十四卦相生圖、考虞氏卦變)の意、其合  
於圖者三十有六卦、又時有所疑。不合者二十有八卦。(漢上易卦圖)

上)

という結果ともなる。然し、兩者の「升降」に據る生卦の方法は、ともにその論理を一にしており、朱震もまた、

虞仲翔、於小過曰、當從四陰二陽臨・觀之例。於豐曰、當從三陰三陽泰之例。於无妄曰、此所謂四陽二陰、非大壯則遯來。……際或變於大壯上之三、或以謂无妄二之五。蓋是時其圖未見。故難於折衷、亦莫得其綱要、諸儒各伸臆說、至於紛然。而仲翔則知有此圖也。

(同右)

と言ひ、「相生圖」の虞氏卦變説に類したるを例證として、虞翻にその由來を求めらるるのである。

つづいて「李圖」九篇の系譜について考えてみたい。その系譜を記すものの主なるものは左の二條である。

一、右、李挺之六十四卦相生圖一篇、通變卦反對圖爲九篇。康節(一〇一一—一〇七七)之子伯溫(一〇五七—一一三四)、傳之於河陽陳四丈忘其名(？)、陳傳之於挺之(？—一〇四五)、始虞氏卦變。(漢上易卦圖「上」)

二、長楊郭氏、序李氏象學先天卦變曰、陳圖南(？—九八九)以授穆伯長(九七九—一〇三三)、伯長以授李挺之(？—一〇四五)、挺之以授邵堯夫(二〇二—一〇七七)・陳安民(？)、安民以授兼山(郭忠孝、號は兼山先生(一一世紀後—一二世紀前)。達(二〇三—一〇八八)の子。雍、字は子和(一一〇三—一一八七)の父)。卦變一義、橫渠・伊川罕言、而兼山獨得之。(林至「易傳傳」外篇)

ともに朱彝尊「經義考」にも引く右の二條のうち、二の兼山が陳安民より「李圖」を傳授されたことは、晁公武「郡齋讀書志」中「兼山易解」の項、陳振孫「直齋書錄解題」中「傳家易說」の項にも、同

じく兼山自らの言として記されており、陳安民——郭兼山の直線的傳授はほぼ信じてよいものと考えられる。然らば、一にも朱震が「其の名を忘る」と注する陳四丈、即ち、兼山の師たる陳安民が問われることと、なる。宋元學案補遺卷十には、

陳安民、字子惠、河陽人。郭兼山忠孝、自言得先天卦變于先生云。其書出李挺之。

と、「直齋書錄解題」のことばを引くのみで他は不詳である。ただ「百源學案補遺」に付するところから考えて、邵雍の後學であり別名を「四丈」といったであらうことは明確である。而して右の二條の(一)内の生歿年に注目すれば、一の朱震の言う系譜の誤りは自ずから明らかである。無論、二の陳圖南より穆伯長への傳授は授學年齢の點で多分に疑わしく、その間に「宋史」李之才傳に本づき種名逸(？—一〇一五)を介在させ年齢的に無理なく連はせるとしても、陳——種は認め得るものの種——穆には斷絶の要あること今井博士の説の如くである(註②參照)。然らば圖を中心とした學統の傳授的系譜は(二)の文に従い、その字號を以て示せば、

陳圖南——種名逸……穆伯長——李挺之——邵堯夫(字子文)・陳子惠——郭兼山(字子和)の線を以て結ばれ、更に兼山とやや並行して朱震(字は子發(一〇七二—一二三八))を加えるのが自然のようである。

## 六 結 語

後に朱子はその「卦變圖」において、「相生圖」の本卦たる六消息卦を虞翻の舊に復して十消息卦とし、それら本卦の爻位の「升降」を以て次序を定め、乾・坤を除く六十二卦の倍數たる百二十四卦生成の過程を秩序正しく排列している。而してその排列は殆ど「相生圖」を

沿襲し敷衍したものと考えられる。更に、その「易本義」中の卦變説十九條もまた「相生圖」の延長線上において理解できるものである。ここにその圖が朱子「卦變圖」及びその卦變説の先蹤としての價値を擔うものであったことを知るのである。然るに後世、「相生圖」に則る朱子の圖と説とを非とし、「反對圖」こそ周易上下經に根據をもつ論理的な圖であると推尊する者が現われた。既に本論中にも觸れた黄・胡二氏の一派がそれである。彼らの眞意は端的に言つて、「相生圖」に據る朱子の卦變を排斥し、延いては所謂朱子學のすべてを否定する點にあつたものと思われる。そのことは是非は今不問として、ただここに結語として言えることは、朱震によつてはじめて意義を認められた「李圖」九篇は、後世、「相生圖」一篇は朱子により又、「反對圖」八篇は黄・胡二氏により、再びその價値を追認されるに至つたということである。

注(1) この九篇を掲げるのは「漢上易卦圖」を嚆矢とするが、後に朱子の門人林至「易傳傳」外篇にもその圖を掲げ、邵氏父子或いは朱震の所論をやや詳細に説き批判を加えている。

(2) 今井字三郎「宋代易學の研究」(明治圖書刊)第一章五「宋代の易學系譜」参照。

(3) 宋史のことばは晁説之「嵩山文集」卷十九所收の「李挺之傳」に據つたものと思われるが、邵雍の子伯溫撰する「易學辨惑」に據る「東都事略」や「宋元學案補遺」は、このBの前に更に「義理の學」を置き、義理・物理・性命の三學として置いている。なお、「四庫提要」子部術數類一の「皇極經世書」では、この三學を記した後、「皇極經世、蓋即所謂物理之學也。」と言つているから、「物理の學」は同書のモチーフとなつたものとも考えられる。

(4) 「反對」は「反復(覆)」ともいい、又、單に「反」ともいう。清儒

李銳は、

反者、以上爲下、以下爲上、六爻俱倒也。(「周易虞氏略例」反第九)と規定する。即ち、所謂「反對」のことである。ただ本論では「反」といわず、すべて「反對」の語に定着させておく。なお、次に「反對」の語に兩義あることを記し、定義上の混亂を避けることにも、本論では④の意味であることを示しておく。

④ 前記の如く「反對」を以て稱するもの

上經三十卦、反對之爲十二卦。下經三十四卦、反對之爲十六卦。乾・坤・頤・大過・坎・離・中孚・小過、不可反對、則反其奇偶以相配、卦之體兩相反、爻亦隨卦而變。……從反對中、明此往來倚仗之理。(黄宗羲「易學象數論」卷二、卦變)

⑤ 「反對」と「對卦」とに分けて稱するもの

上經、乾與坤對、頤與大過對。下經、中孚與小過對。陰陽爻、各各相對也。何謂反。如屯反爲蒙、既濟反爲未濟、一卦反爲兩卦也。對者八卦、反者二十八卦、而六十四卦次序成矣。(胡一桂「周易啓蒙翼傳」上篇、文王六十四卦反對圖)

⑥ これらのことについては、次の拙稿で詳述した。

⑦ 荀爽の卦變説について(日本中國學會報 第三十四集 所收)

⑧ 虞翻の卦變説について(北海道中國哲學會刊「中國哲學」第十三號 所收)

(6) その爻位の變は、一卦形において、初と上・二と五・三と四・四と三・五と二・上と初の如く正反對となる。

(7) 以後、「漢上易卦圖」始め他書に引く邵雍のことばは、すべて「性理大全書」本に據り、字句の補訂を試みた。

(8) 變者、以不變爲體。不變者、以變者爲用。四象並行、八卦交錯、而天地萬物之情可見矣。(漢上易傳序)

(9) 清包爾等注「皇極經世緒言」九卷首一卷。引用文はすべて、道光十

年、錢塘徐樹堂刊本（京都大學人文科學研究所藏）に據った。

(10) 「相生」の語は「五行相生」説より考えつかれたものであろう。「春秋繁露」に五行の相生を父子相授受するに模して説く、「五行之義第四十二」ところから考えて、「相生圖」は本卦たる消息卦より之卦を生じ、之卦が本卦となつて更に新たな之卦を生ずるものと見るべきである。たとえば夫卦は消卦たる姤卦より生ずることはもちろんであるが、直接には大有卦より生じ、大有は小畜より、小畜は履より、履は同人より、同人は姤より生ずるものと見るのである。朱震はこれを次の如く解説する。

夫、自姤五變。一變同人。二變履。三變小畜。四變大有。（漢上易傳「繫辭下傳第八」）

(11) その爻位の變を、「項氏家説」のことばにより整理すれば次のようになる。

陰陽	復	初	變	再	變	三	變	四	變	五	變	變の基礎
一陰一陽		二		三		四		五		上		初爻
二陰二陽		初三		初四		初五		初上				初二の兩爻
	第一復	二三		二四		二五		二上				
	第三復	三四		四五		五上						
	第四復	三五		四上								
	第五復	三上										
三陰三陽		初一		初二		初二		初二				初二三の三爻
	第一復	初三		初四		初五		初上				
	第二復	三四		四五		五上						
	第三復	三四		四五		五上						

なお、「復」の意については註(12)を参照。

(12) (10)の例は、復・姤一陰一陽のみについてのことであるが、臨・遯二陰二陽と否・泰三陰三陽との卦では、初回の四變又は三變ののち本卦にかえり、復び新たな變の形式をとる。これを「復」と稱する。たとえば巽卦は臨の第二復升の四變の卦であり、巽卦は泰の第三復復の三變の卦である。又、「復」の初變は本卦より直接に變じた卦である。

(13) ここに言ひ「内」・「外」とは、内卦・外卦のことである。具體的には、朱震は自らの「易傳」において、内卦外卦を問はず爻位の變するに「變」・「之」のほか、主に「上」・「下」の語を用い、内卦より外卦へ之くに「往」、外卦より内卦へ之くに「來」といひ、又、下に「息」すれば上に「消」し、下に「消」すれば上に「息」するを以て「消息」といひが、結果的には爻位の「升降」を指す。

(14) 因みにいへば、朱子「易本義」の篇首に掲げる「卦變圖」は、この次序を念頭において作成されている。

傳家に説く上下内外・往來を本卦				種別	卦名	象	傳	論者の解説
大畜	遯	觀	大壯	夬	三變	剛中而應	故聚	臨の第三復の初變小過の九三、五二に往きて九五となり、中を得て六二に應ずる。
遯三變爲其德剛上而尚賢。	臨三變爲大觀在上。中正以觀天下。	大者壯也。剛以動。	遯三變爲大畜壯也。剛以動。	遯三變爲	遯の第三復の初變小過の再變の卦に往きて九五となり、上九の賢者を尚ぶ。	臨の第三復の初變小過の再變の卦に往きて九五となり、上九の賢者を尚ぶ。	大觀在上。中正以觀天下。	大畜の初變中孚の再變の卦に往きて上六となり、上六の賢者を尚ぶ。
遯の第三復の初變小過の再變の卦に往きて九五となり、上九の賢者を尚ぶ。	臨の第三復の初變小過の再變の卦に往きて九五となり、上九の賢者を尚ぶ。	大者壯也。剛以動。	遯の第三復の初變小過の再變の卦に往きて上六となり、上六の賢者を尚ぶ。	遯の第三復の初變小過の再變の卦に往きて九五となり、上九の賢者を尚ぶ。	遯の第三復の初變小過の再變の卦に往きて九五となり、上九の賢者を尚ぶ。	臨の第三復の初變小過の再變の卦に往きて九五となり、上九の賢者を尚ぶ。	大觀在上。中正以觀天下。	大畜の初變中孚の再變の卦に往きて上六となり、上六の賢者を尚ぶ。

本卦	復	姤	臨
	遯	同人	明夷
反對圖	比	大有	屯
	坤	小畜	節
相生圖	師	同人	明夷
	比	大有	節

(16) その實際は次表の如くである(○で圍んだ卦)。即ち、兩圖同じくする本卦六卦と、本卦の所屬をともしにする四十二卦との合計が四十八卦である。(但、「反對圖」の三陰三陽 否・泰を本とする卦は、反對卦をも該本卦に屬せしめた。)

接直の變のてしと變の接直の變のてしと		
封るぎで解理		
兌	艮	睽
遯五變爲三上	臨五變爲三上	遯四變爲三五
剛中而柔外。	上下敵應。	柔進而上行。得中而應乎剛。
往きて	往きて	往きて
遯の六二、上に往きて	臨の九二、上に往きて	遯の初六、三に往きて
兌封剛中の外となる。	上下敵應の卦形となる。	睽封の中を得、九二の剛交に應ずる。

(18) 前註と同じく、末尾の數字は「漢上易傳」の卷數を示す。

○頤、臨之變、自震來。四之五。震者乾交於坤、一索得之、剛柔始交也。四之五成坎、坎、險難。剛柔始交而難生也。(屯、一)  
 ○頤、自臨九二變之。一變明夷。離爲目、觀也。自內觀外、觀其人之所養也。所養正歟君子也。所養不正歟小人也。觀其所養是非美惡、无所逃矣。故曰觀頤。此以臨二初變、明在人者養之之道當正也。四變頤。自離變艮。艮爲手求也。自外觀內、反觀己之自養、以考正與不正。(頤、三)

(17) 本文の解・鼎一卦以外の例を左記する(末尾の數字は「漢上易傳」の卷數を示す)。

六卦	否	泰	歸妹	益	節	噬嗑	未濟
四二卦	恆	豐	既濟	未濟	節	噬嗑	未濟
四二卦	益	節	噬嗑	未濟	節	噬嗑	未濟

○需、自大壯變。大壯、四陽同德、四與五孚、未進之時。雖未得天位、其德固已剛健有孚。特道未彰爾。及其自四而進、則位乎天位、乃光亨也。(需、一)

○剛健乾也。篤實長也。大畜者、大壯九四變也。一變爲需、再變爲大畜。需有坎・離相合、發爲輝光。進而上行成艮。互有兌・震。兌西震東、日所出入、日新其德也。剛健則不息、篤實則悠久。兩者合一、畜而爲德。動而有光、其光輝散。又日新无窮、進而不已、自畜其德者也。故曰、剛健篤實輝光、日新其德。此合乾・艮兩體、而又推大壯之變、以言大畜也。(大畜、三)

(19) 今驗六十四卦、二二相稱、非覆即變。覆者、表裏視之、遂成兩卦。屯・蒙、需・訟、師・比之類、是也。變者、反覆唯成一卦、則變以對之。乾・坤、坎・離、大過・頤、中孚・小過之類、是也。〔周易正義〕序卦第十

(20) 朱子も、改めた際、韻の合うことは認めつつも、錯亂説には疑をもち次の如く言う。

自大過以下、卦不反對、或疑其錯簡。今以韻協之、又似非誤、未詳何義。(易本義)